

会 長 講 演

第18回 看護実践学会学術集会

看護実践の変革と創出、そして伝承

坂本 和美

金沢市立病院 看護部長

日時：2025年9月27日(土) 会場：石川県地場産業振興センター A会場(大ホール)

石川先生、過分なご紹介を頂きましてありがとうございます。ただ今ご紹介いただきました金沢市立病院の坂本です。このたびは大会長という大役を頂きまして、心より感謝申し上げます。また、本日はお天気も良く、そして多くの皆さまにご参加いただきましたこと、誠にありがとうございます。本日を迎えるに当たっては、1年以上にわたる準備期間を経て、こうして無事に開催の運びとなりました。関係者の皆さまのご尽力にも改めて敬意を表したいと思います。

それでは早速講演を始めさせていただきます。開示すべきCOIはありません。

社会背景

昭和100年という言葉が今年、皆さんも耳にされたことが多いのではないかと思います。昭和元年から数えて来年は満100年という節目の年になります。このスライドは内閣府が開設したポータルサイトで、昭和100年を機に昭和の時代を振り返ろうという取り組みです。

昭和の時代は未曾有の激動と変革、苦難と復興の時代でした。というふうに、そこには書かれています。昭和には第二次世界大戦があり、そしてその後は高度経済成長を迎え、激動の時代だったと思います。そして令和を迎えた今、私たちを取り巻く環境は昭和を凌ぐ勢いで変化しています。

例えば、明らかに今までとは異なる災害が発生し、他国では戦争が起こり、AI技術も加速度的に進化している中、予測不能な事態が次々と起こっているということは、皆さんも日々実感されていることではないでしょうか。そして、2025年

問題、2040年問題、これらに象徴される人口構造の変化というものは、働き世代が急激に減っていくということを意味しており、これらは直接的あるいは間接的に看護にまでも影響を与えているというところは確かです。私たちはこのような看護の現場にあっても、今できる最良のケアを提供し続けていくという使命があります。そのためには、新しい技術を積極的に取り入れる、今までのものの見方を変えるしなやかさを持つ、ピンチをチャンスに変えていくような実行力を持つといったようなことが必要ではないかと考えます。

今回の学会テーマ

今回のメインテーマを「看護実践の変革と創出、そして伝承」といたしました。キーワードである「変革」、「創出」、「伝承」は、私たちがこれまでの経験から得た知識や実践を未来へつなぐために必要なことだと思います。「今あるものを変えていく」、「新たなものをつくり出していく」、そして「看護の本質を後世に伝えていく」。この三つは、将来あるべき看護をつくるために揺るがないことだと考えます。

時代の変遷の中で看護師に求められてきたこと

時代や医療制度の変化に応じて看護師に求められてきたことを振り返ってみます。私たち看護職は、昭和23年に制定された保健婦助産婦看護婦法により、国家資格を持つ専門職となりました。そして、看護師の業務である診療の補助と療養上の世話は、77年たった今もお、看護の実践を支える基盤となっています。医療が高度化・複雑化する

る中で、看護職にもより高度で専門的な実践が期待されるようになりました。1996年には専門看護師、翌年には認定看護師、2015年には特定行為を実践する看護師教育が制度化されました。そして2008年には診療看護師の養成教育が始まっています。これらによって看護師は活躍の場と役割を広げてきました。

そして、特定行為は、診療の補助の一部として、包括的指示の下、手順書に沿って看護師が病状に応じて判断し実施できるものです。これが実現したことで、医師を待たずに迅速に処置ができる場面も増え、活躍の場は病院内にとどまらず地域へと広がっています。

もう一方の療養上の世話は、看護師の独占業務であり、看護師が専門的な判断に基づいて自律的に行う実践です。そして、患者さんの回復過程を支え、生活の質を高める上で欠かせない重要なケアです。診療の補助と療養上の世話というこの二つを駆使して、看護師は超高齢化時代に一層の役割を果たしていかなければならないと考えます。

そして、超高齢化時代を支える地域包括ケアシステムの下、医療や看護の提供の場は多様化し、切れ目のない医療、医療と介護の連携は、今や必要不可欠となっています。患者さんを生活者として捉え、次の療養の場へつなぐ在宅療養移行支援は多職種で行われ、その要の役割を担っているのは看護師です。多様な療養の場において、高度かつ専門性の高い実践ができる看護師が活躍し、患者さんのその人らしい生き方を支え寄り添えるのは、医療と生活の二つの視点から介入できる看護師だからこそです。

そして、時は令和となり、新型コロナウイルスのパンデミックを契機に、人との接触を避ける意味で、診療や教育、会議などにAIやDXが取り入れられました。そして、アフターコロナとなった今、業務の効率化はもちろん、患者さんの安全や正確な業務を可能とするAIが搭載された医療機器や、看護記録の音声入力などが製品化されています。そして、それらを導入する施設も増えてきています。私たち人間が多く時間を費やし、そして頭を使って今までやってきたことが、AIやDXを導入することでいとも簡単に、そして正確にやれることには本当に驚かされます。ただ、効率化ばかりが優先されることのないように、何のための効率化であるのかということも同時に考えていく必要があるのだと思います。

『看護をめぐる「業務」と「ケア』』という本
このような環境の変化や看護師の役割が拡大している今、現場で働く看護師たちは日々の看護実践についてどう感じていると皆さんは思われますか。『看護をめぐる「業務」と「ケア』』という本について少しお話しさせていただきます。これは2024年に実施したアンケート結果を基に書かれています。

「現在の立場で勤務する中で、業務が忙しくてケアができないと感じたことがありますか」という質問に対して、「はい」と答えた方が62.7%でした。ここでいう業務というのは看護業務のことで、文中では看護業務は「しなければいけないとされる行為」という解釈で、看護師たちの認識は、しなければいけないとされる行為に療養上の世話も含まれているという内容です。先ほどのスライドで、療養上の世話は患者の回復過程を支え、生活の質を高める重要なケアと述べましたが、それが現状は看護ケアとしては機能していないということかなというふうに思いました。

そして、ケアができないと感じた要因についても質問されています。上位から、「看護記録に時間がかかる」「帳票作成に時間がかかる」「入院期間が短く患者さんと接する時間が短くなった」「ベッドサイドで行うタスクが多い」といった結果でした。皆さんもこの結果を見たら納得されるのではないかと思います。

この背景には、診療報酬や働き方改革など、現代の社会的要因が大きく影響し、現場の慌ただしい中で取りあえずやらなければならないことを間違えずに、そして時間で終わるようにしなければいけないといったような情景が垣間見られます。そうだとすれば、しなければいけないということを幾つも抱え、取りあえず、しなければならぬスケジュールを優先させ、療養上の世話も実施しているけれども、自分たちが納得できるケアではないというふうに捉えているのではないかと思います。

パトリシア・ベナーは、人間理解において、そして看護実践において、気遣い、関心が極めて重要であると述べています。その理由の一つが、看護師が気遣い、関心を持つことで、患者さんも気遣われている、関心を持たれていると感じ、信頼関係が生まれる。その信頼関係があるかないかでケアの結果は異なるというものです。スケジュールどおりに手順に沿って安全に実施するというのも重要なことです。ただ、私たちのケアの対象

は人です。患者さんのベッドサイドにいるときは、業務であってもケアであっても、常に患者さんへ関心を向けることが必要ではないでしょうか。

そして、ケアができないというのは、忙しい現場の中で自分たちのやりたい看護ができていないという葛藤もあるのだと思います。患者さんの回復過程を促し、ケアの成果が出せる、やりたい看護ができる、そういう職場環境をつくっていくことが看護管理者に求められていることと改めて実感しました。

そして、先ほどのアンケートの一つに、「良いケアができたと感じるのはどんな場面か」という質問がありましたので、この質問を当院の看護師にも聞いてみました。88件の回答です。その結果、一番多かったのは、患者さんからの感謝の言葉、そして清潔ケア、笑顔、表情でした。

特に私が共感できた場面を二つご紹介いたします。一つ目は清潔ケアの場面です。易怒性があり、看護師にも手が出る患者さんで、拘縮が強く、なかなか清潔ケアができなかった患者さんの手浴をした際に、初めて「ありがとう」と笑顔が見えたとき、こんなにも素敵な表情をされるのだと、その表情を引き出せたときに良いケアができたのかなと感じました。もう一つは、受け持ちとして病室に訪室したときの場面です。腹水が貯留し、今後の症状の進行に不安と恐怖で押しつぶされそうな患者さんの思いを聞き、そばで寄り添いました。自分が訪室すると、いつも待ってましたとばかりに喜んでくれたことが、逆に自分の励みとなりました。皆さんはこのケアをどう感じられたでしょうか。そして、皆さんもこういった経験をたくさんされているのではないかと思います。

良いケアができたという実感は、患者さんから

の反応という評価を通して得られるもので、自分だけの行為によって感じられるものではありません。そして、関心という思いが伝わるようなケアを行うからこそ、ケアの効果が最大限に発揮され、反応として返ってくるのだということをアンケート結果から改めて実感いたしました。

そして、患者さんにとって、そのケアを行う看護師が誰でもいいというわけではありません。あなたが受け持ちでよかったという言葉や、いつも待ってましたとばかりの態度はその看護師に向けられたもので、唯一無二の存在として信頼関係が築かれているからだと思いました。そして、患者さんとの関係性を築くということは、AIにはできない、看護師だからこそできることではないのでしょうか。

AIにできない看護師の仕事とは

実際にAIに、「AIにできない看護師の仕事は？」ということを探ってみました。答えは五つです。感情に寄り添うケア、非言語的な変化への気付き、倫理的判断とその責任、関係性の構築と継続、ケアの創造性と柔軟性、この五つでした。確かに、関係性の構築はできないということをAIは自覚していました。そして、この五つは、私たちがこれまで日々実践してきた看護の本質的な部分ではないかと思い、納得させられた結果でした。

これからも先の見えない不確実な時代が続きます。そして、私たちの看護実践はこれからも時代とともに進化していきます。看護師にしかできないことは何かということ問い続けていくことが必要なのではないのでしょうか。

これで講演を終わります。ご清聴ありがとうございますございました。